

原著

アタッチメント・スタイルがネット依存傾向にもたらす影響

川原 正人¹⁾

The Effect of Adult Attachment Style on Internet Addiction Tendency

Masato Kawahara

要 約

近年、スマートフォンの普及などに伴い、ネット依存への関心が高まっている。本研究では、大学生のネット依存傾向の実態を調査するとともに、アタッチメント・スタイルがネット依存傾向にもたらす影響について検討した。今回の調査では先行研究に比べて中程度のネット依存傾向の割合が増えており、インターネットに時間を費やしているだけでなく、生活全般への効力感や統制感の低下が示唆された。アタッチメント・スタイルの2次元・4分類モデルにもとづきネット依存傾向について検討したところ、回避からは負の影響、不安からは正の影響がもたらされることが明らかとなった。回避と不安の次元によって4分類し検討したところ、とらわれ型、恐れ型、安定型、拒絶型の順にネット依存傾向が高いことが確認された。親密な人間関係の回避や見捨てられることへの不安がネット依存傾向の程度に影響していることが示された。

キーワード：ネット依存、アタッチメント・スタイル、回避、不安、2次元・4分類モデル

1. 問題と目的

近年、生活のあらゆる場面でICT化、IoT化が進み、ますますインターネットは身近なものとなっている。総務省（2017）の情報通信白書によると、スマートフォンの爆発的普及によりモバイルからのインターネット利用時間が増加し、特に10代20代のSNSの利用時間が長く、ネット上でつながったり情報を共有していることが明らかとなっている。生活の利便性が高まる一方で、インターネット利用時における不安も出てきている。総務省（2018）の通信利用動向調査によると、12歳以上のインターネット

利用者の約7割がインターネット利用時に何らかの不安を感じており、20代を除きすべての世代で前年度より上昇している。個人情報やインターネット利用履歴の漏えい、コンピュータウイルスへの感染、迷惑メール、架空請求やインターネットを利用した詐欺などへの懸念が高いが、不安の内容としてインターネット依存（以下ネット依存）も挙げられており、平成28年には10.1%、平成29年には11.8%の人が不安を感じている。また、時間や場所を選ばないスマートフォンを用いたソーシャルメディア依存といった、新たな形態の依存傾向が増加しているのではないかと懸念されている（総務省情報通信政策研究所、

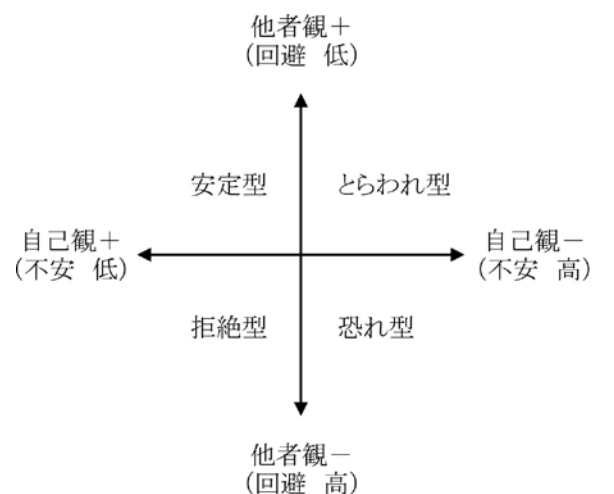
1) 川原 正人 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) kawahara-masato@tokyomirai.jp

2014)。

インターネットの過度な使用によって生活や健康に支障をきたすネット依存については、Young (1998)の研究を嚆矢に臨床的にも社会的にも注目されるようになってきた。2013年にアメリカ精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Edition: DSM-5) において今後の研究のための病態という位置づけながらインターネットゲーム障害 (Internet gaming disorder) が記載され、2018年には世界保健機関による疾病及び関連保健問題の国際統計分類 (International Classification of Diseases and Related Health Problems, 11th Revision: ICD-11) にゲーム症 (Gaming disorder) が正式に追加された。しかし、依存症になる前段階である依存傾向者に関する研究はまだ多くない (片山・水野, 2016; 鄭, 2008a)。ネット依存傾向がもたらす影響について、大学生を対象とした研究 (伊藤, 2009; 片山・水野, 2016; 川原, 2017; 鄭, 2008a, 2008b) や児童生徒を対象とした研究 (稲垣・和田・堀田, 2016; 戸田・竹内・堀田, 2010; 山脇・小倉・濱田・本城・金子, 2012) が行われ、精神的健康、身体的健康、学校生活、人間関係などに影響があることが示されている。川原(2017)は自己・他者へのポジティブおよびネガティブな信念であるスキーマのありようがネット依存傾向に影響することを明らかにしている。

青年期、成人期の精神的健康に関わる要因の1つとして、乳幼児期からの養育者との愛着関係にもとづくアタッチメント・スタイルの影響が検討されている (立丸・中谷・堀・大塚, 2010; Wei, Heppner, Russell, & Young, 2006など)。Bowlby (1969, 1973, 1980) によると、養育者との間で形成された愛着関係はその後の対人関係に関するモデル (内的作業モデル) として一般化される。内的作業モデルは幼少期のみに影響するのではなく、青年期、成人期に至るまで対人関係に影響し、アタッチメント・スタイルが形成されていくと考えられている。このアタッチ

メント・スタイルを捉えるためにさまざまな研究が行われてきたが、有用とされているのが Bartholomew & Horowitz (1991) によって提唱された2次元・4分類モデルであり、自己についての内的作業モデルと他者についての内的作業モデルがそれぞれポジティブかネガティブかによってアタッチメント・スタイルを分類する (Figure 1)。自己観がネガティブであれば見捨てられる不安が高く、他者観がネガティブであれば親密な関係を回避することになる。①自己観と他者観がともにポジティブであれば安定型 (低回避+低不安)、②自己観がポジティブで他者観がネガティブであれば拒絶型 (高回避+低不安)、③自己観がネガティブで他者観がポジティブであればとらわれ型 (低回避+高不安)、④自己観と他者観がともにネガティブであれば恐れ型 (高回避+高不安) に分類される。このモデルにもとづいた測定尺度として、Brennan, Clark & Shaver (1998) によって ECR (Experiences in Close Relationships) が作成され、さらに項目反応理論を用いて再構成された ECR-R (Fraley, Waller, & Brennan, 2000)、ECRや ECR-Rが持つ問題点を解消した ECR-RS (Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh, 2011) が作成され、有用性が示されている。



(Bartholomew & Horowitz (1991), Brennan et al. (1998) をもとに作成)

Figure 1. アタッチメント・スタイルの2次元・4分類モデル

総務省情報通信政策研究所（2014）はネット依存傾向の高い者の人間関係の特徴について、「幅広く友達を持つということにも、深い人間関係を持つことについても回避的であり、人から拒絶されることへの不安から、目先の対立を避けることを優先する傾向」があり、「現実の交友関係の範囲を限定し、友達とも家族とも比較的距離を置いた関係であり、現実の人間関係、生活に不満を持っている人が他の層に比べて高い割合で存在する」と述べている。こうした対人関係のあり方に影響を与えているのがアタッチメント・スタイルであると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では大学生を対象として、アタッチメント・スタイルがネット依存傾向にもたらす影響について検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象および手続き

大学の講義終了後の時間を利用し、大学生279名（男性65名、女性211名、不明3名）を対象に質問紙調査を実施した。分析には質問紙の全ての項目に回答した249名（男性57名、女性192名、平均年齢18.33歳、 $SD=60$ ）のデータを用いた。

(2) 調査時期

2017年4月下旬から5月上旬にかけて質問紙調査を実施した。

(3) 調査内容

①インターネット依存度テスト（IAT）

ネット依存傾向を測定するために、Young(1998)によって作成されたInternet Addiction Test (IAT) を久里浜医療センターネット依存治療部門が邦訳したものをを用いた。使用にあたって久里浜医療センターに許可を得た。IATは20項目からなり、各項目について「全くない」（1点）から「いつもある」（5点）の5件法で回答を求め、合計得点を算出した。20-39点はネット依存傾向は低く、40-69点は何らかの問題が生じている中程度のネット依存傾向、70-100点は生活に重大な影響をもたらしており高いネット依存傾向と判定され

る。利用機器の説明として、パソコン、携帯電話、スマートフォン、ゲーム機などオンラインで使用するすべてが含まれることを教示文に記載した。

②アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）日本語版

成人のアタッチメント・スタイルを測定するために、Fraley et al. (2011) によって作成された the Experiences in Close Relationships - Relationship Structures Questionnaire (ECR-RS) を古村・村上・戸田 (2016) が邦訳したアダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）日本語版を用いた。ECR-RS 日本語版は回避6項目と不安3項目からなり、各項目について「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（7点）の7件法で回答を求め、逆転項目は点数を反転させた上で不安と回避の合計得点を算出した。ECR-RSは、母親あるいは母親の役割をしている人、父親あるいは父親の役割をしている人、配偶者あるいは恋人、最も親しい友人それぞれについて尋ねることができるが、今回の調査では友人を対象とし、教示文に記載した。

3. 結果

(1) ネット依存傾向

調査対象者のIATの合計得点を算出し、高い依存傾向（70-100点）、中程度の依存傾向（40-69点）、低い依存傾向（20-39点）に分類すると、それぞれ8.0%、54.2%、37.8%であった。IATの合計得点および項目別分布を総務省情報通信政策研究所（2013）の大学生のデータおよび川原（2017）の調査と比較したところ、合計得点については高い依存傾向、中程度の依存傾向ともに今回の調査の方が上回っており、低い依存傾向が川原（2017）と比較して9.5ポイント、総務省情報通信政策研究所（2013）と比較して11.1ポイント少なかった（Figure 2）。項目別分布の「いつもある」と「ある」を合わせた「ある（計）」の割合を見ると、2つの先行研究より10ポイント以上高い項目（括弧内は総務省版での表記）は「気が

つくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることがありますか（気がつく、思っていたより長い時間ネットをしていることがありますか）」「他にやらなければならないことがあっても、まず先に電子メールをチェックすることがありますか（他にやらなければならないことがあっても、まず先に電子メールやSNSなどをチェックすることがありますか）」であった。「全くない」の割合を見ると、2つの先行研究より10ポイント以上低い項目は「配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことがありますか（配偶者や友だちと過ごすよりも、ネットを利用したいと思うことがありますか）」「インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことがありますか（ネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことがありますか）」「インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことがありますか（ネットをする時間や頻度を減らそうとしても、できないことがありますか）」であった（Table 1；総務省が用いたIATには言い回しがやや異なる項目もあるため、比較するにあたってすでに項目別分布を報告している総務省の用いた表現を優先して記載した）。

(2) IATとECR-RSの関連

ECR-RSの9項目について最尤法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究とほぼ同等の因子構造が再現された。しかし、ECR-RS日

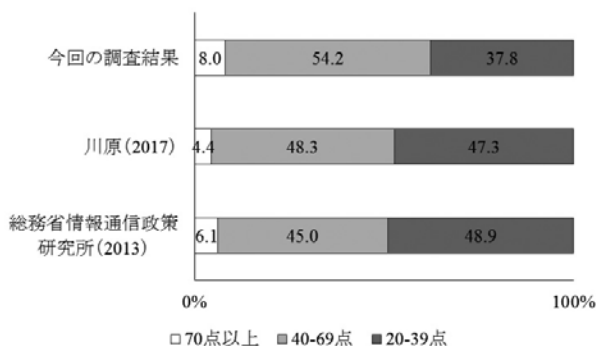


Figure 2. IATの合計得点の比較

本語版を作成した古村他（2016）の研究と同様、本研究でも「自分が心の奥底で考えていることを知られたくない」という項目の因子負荷量が低かったため、この項目を除いて再度因子分析を実施した（Table 2）。第1因子は従来の「回避」、第2因子は「不安」に相当する内容であった。Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子が.848、第2因子が.926と十分な値を示した。第1因子に高い負荷を示した5項目の合計を回避得点（項目1～4を逆転項目として計算）、第2因子に高い負荷を示した3項目の合計を不安得点とした。

各尺度の基本統計量とPearsonの積率相関係数をTable 3に示した。IATは回避との間に負の相関、不安との間に正の相関が見られた（ $r=-.61, p<.01$; $r=.85, p<.01$ ）。回避と不安の間には負の相関が見られた（ $r=-.41, p<.01$ ）。IATおよび回避と不安について性差が見られるか t 検定を行った結果、不安については男性の方が高かった（ $t=2.07, p<.05$ ）。IATと回避には有意な差は見られなかった（ $t=1.79, n.s.$; $t=1.39, n.s.$ ）。

回避と不安の得点を独立変数、IATの合計得点を従属変数として重回帰分析を行った（Table 4）。重決定係数は有意であった（ $R^2=.80, p<.001$ ）。回避と不安の標準偏回帰係数はともに有意であった（ $\beta =-.32, p<.001, \beta =.72, p<.001$ ）。

Bartholomew & Horowitz（1991）やBrennan et al.（1998）にもとづき調査対象者を安定型（低回避+低不安）、拒絶型（高回避+低不安）、とらわれ型（低回避+高不安）、恐れ型（高回避+高不安）に分類した。分類にあたって各尺度の平均得点を基準とした（Table 5）。アタッチメント・スタイルによってネット依存傾向に違いがあるのかを検討するために分散分析を行ったところ、有意な主効果が見られた（ $F(3,245)=92.28, p<.001$ ）。Tukey法による多重比較の結果、すべての組み合わせで有意な差が見られ、とらわれ型、恐れ型、安定型、拒絶型の順に高かった（Table 6）。

Table 1. IATの項目別分布の比較

上段：今回の調査結果

中段：川原(2017)の調査結果

下段：総務省情報通信政策研究所(2013)による報告

※ある(計) = いつもある + よくある

※※濃い網かけは2つの先行研究との間に10ポイント以上の差、薄い網かけは5ポイント以上の差を表す

	いつもある	よくある	ときどきある	まれにある	全くない	ある(合計)		いつもある	よくある	ときどきある	まれにある	全くない	ある(合計)
1	気がつく、思っていたより長い時間ネットをしていることがありますか						2	ネットを長く利用していたために、家庭での役割や家事(炊事、掃除、洗濯など)をおろそかにすることがありますか					
	30.1	39.0	18.1	10.4	2.4	69.1		13.7	14.5	29.3	19.3	23.3	28.1
	18.4	34.8	22.2	17.4	7.2	53.1		6.3	16.4	26.1	25.6	25.6	22.7
	17.8	34.2	23.7	12.6	11.7	52.0		3.8	8.2	20.3	21.1	46.6	12.0
3	配偶者や友だちと過ごすよりも、ネットを利用したいと思うことがありますか						4	ネットで新しく知り合いを作ることがありますか					
	2.4	4.0	19.7	35.7	38.2	6.4		5.6	12.4	20.9	22.9	38.2	18.1
	2.4	3.9	12.6	27.1	54.1	6.3		4.8	14.5	23.7	22.2	34.8	19.3
	2.2	6.9	15.5	19.7	55.7	9.1		3.9	7.7	16.9	17.9	53.5	11.6
5	周りの人から、ネットを利用する時間や頻度について文句を言われたことがありますか						6	ネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことがありますか					
	1.6	10.4	18.9	29.7	39.4	12.0		6.4	10.0	22.5	32.5	28.5	16.5
	3.4	6.8	13.5	28.5	47.8	10.1		1.9	3.9	21.3	32.9	40.1	5.8
	1.3	6.9	11.4	15.1	65.3	8.2		4.5	9.0	16.8	21.0	48.8	13.5
7	ネットが原因で、仕事の能率や成果に悪影響が出ることがありますか						8	他にやらなければならないことがあっても、まず先に電子メールやSNSなどをチェックすることがありますか					
	4.4	7.2	16.1	29.7	42.6	11.6		19.3	25.7	20.9	22.9	11.2	45.0
	1.4	5.3	13.5	27.1	52.7	6.8		12.6	17.9	20.8	34.8	14.0	30.4
	3.5	8.8	18.7	19.5	49.5	12.3		10.1	19.4	22.4	21.1	26.9	29.5
9	人にネットで何をしているのか聞かれたとき、いいわけをしたり、隠そうとしたりすることがありますか						10	日々の生活の問題から気をそらすために、ネットで時間を過ごすことがありますか					
	2.8	5.6	15.3	19.7	56.6	8.4		9.6	20.5	23.7	25.7	20.5	30.1
	1.4	7.2	9.2	21.7	60.4	8.7		7.7	14.5	24.6	26.1	27.1	22.2
	3.6	8.1	17.1	20.0	51.2	11.7		7.2	18.8	22.1	20.1	31.7	26.0
11	気がつけば、また次のネット利用を楽しみにしていることがありますか						12	ネットのない生活は、退屈で、むなしく、わびしいだろうと不安に思うことがありますか					
	10.8	14.9	24.9	27.3	22.1	25.7		9.2	14.9	27.3	23.3	25.3	24.1
	6.3	14.0	22.7	30.0	27.1	20.3		5.3	13.0	17.4	35.3	29.0	18.4
	8.5	18.7	20.1	19.2	33.4	27.2		8.4	14.5	22.1	22.0	33.0	22.9
13	ネットをしている最中に誰かに邪魔をされると、いらいらしたり、怒ったり、言い返したりすることがありますか						14	夜遅くまでネットをすることが原因で、睡眠時間が短くなっていますか					
	2.4	5.2	13.7	26.5	51.8	7.6		13.7	22.5	20.1	29.7	14.1	36.1
	1.9	5.3	10.1	17.9	64.7	7.2		9.2	19.3	21.7	31.4	18.4	28.5
	1.9	5.1	12.6	20.8	59.6	6.9		10.3	21.3	23.3	21.6	23.6	31.5
15	ネットをしていないときでも、ネットのことを考えてぼんやりしたり、ネットをしているところを空想したりすることがありますか						16	ネットをしているとき「あと数分だけ」と自分で言い訳していることがありますか					
	2.4	4.8	9.6	22.9	60.2	7.2		12.0	19.7	17.7	26.9	23.7	31.7
	1.9	4.3	10.1	18.8	64.7	6.3		8.7	15.9	19.3	25.1	30.9	24.6
	2.0	5.2	11.7	16.8	64.3	7.2		11.4	20.4	18.7	18.4	31.1	31.8
17	ネットをする時間や頻度を減らそうとしても、できないことがありますか						18	ネットをしている時間や頻度を、人に隠そうとすることがありますか					
	10.4	16.9	21.7	28.1	22.9	27.3		1.6	4.8	9.2	14.5	69.9	6.4
	6.3	14.0	21.7	24.6	33.3	20.3		0.5	1.0	7.7	15.9	74.9	1.4
	7.7	16.6	20.3	20.5	34.9	24.3		4.1	8.7	11.1	15.5	60.6	12.7
19	誰かと外出するより、ネットを利用することを選ぶことがありますか						20	ネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことがありますか					
	2.0	4.8	9.6	18.9	64.7	6.8		2.4	4.0	5.2	22.1	66.3	6.4
	2.4	1.9	7.7	16.9	71.0	4.3		2.4	1.4	8.2	17.4	70.5	3.9
	4.1	8.2	16.8	16.9	54.0	12.3		2.3	6.5	12.3	16.4	62.5	8.8

Table 2. ECR-RS の因子分析結果

項目	F1	F2
因子1：回避		
1 私は、その人に個人的なことを相談する	.85	-.02
2 私は、たいいていその人に自分の問題や心配事を話す	.83	.07
4 必要なときはその人に頼り助けてもらうことができる	.72	.07
3 その人は、私にとって頼りやすい人だ	.71	-.04
6 私は、その人に心を開くことを心地よく感じない	-.49	.16
因子2：不安		
8 その人が私のことを本当は大切に思っていないのかもしれないと、たびたび心配になる	.01	.98
9 私は、その人に見捨てられるのではないかと不安に思う	-.04	.88
7 私がその人を大切に思っているほど、その人は私のことを大切に思っていないのではと心配になる	.03	.84
因子間相関	F1	F2
	F1	-.31

Table 3. IAT と ECR-RS の基本統計量と相関

	基本統計量		相関関係	
	Mean	SD	IAT	回避
IAT	46.55	14.52		
回避	23.52	2.75	-.61 **	
不安	6.98	2.63	.85 **	-.41 **

** $p < .01$

Table 4. IAT に対する回避と不安の重回帰分析結果

	IAT	
	β	R^2
回避	-.32 ***	.80 ***
不安	.72 ***	

*** $p < .001$

4. 考察

本研究では、アタッチメント・スタイルがネット依存傾向にもたらす影響について検討した。

まず、今回の調査協力者のネット依存傾向の特徴を把握するために、川原（2017）および総務省情報

通信政策研究所（2013）の大学生のデータと比較した。今回の調査結果においては先行研究に比べて低い依存傾向の割合が減った分、中程度の依存傾向が増えているという傾向が見てとれた。項目ごとに検討すると、気がつくインターネットをしていたり、優先してしまうといったインターネットへの接近行

Table 5. ECR-RS によるアタッチメント・スタイルの分類

		安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型
		(N=39)	(N=75)	(N=82)	(N=53)
回避	M	22.00	25.99	20.88	25.25
	SD	1.21	1.44	1.87	1.41
不安	M	4.74	4.68	9.11	8.6
	SD	0.99	1.14	2.01	1.73

Table 6. アタッチメント・スタイルを要因とした分散分析

		安定型 (N=39)	拒絶型 (N=75)	とらわれ型 (N=82)	恐れ型 (N=53)	F
IAT	M	40.69	33.36	58.94	50.34	$F(3,245)=92.28$
	SD	6.35	7.24	11.76	12.34	$p < .001$

群間差：安定型と拒絶型の差は $p < .01$ 、他の組み合わせはすべて $p < .001$

動が増えるのみならず、時間を減らそうとしてもうまくできず、やるべきことや学業などに支障をきたすことが「ない」とは言い切れないという特徴が見られた。インターネットへの接近行動を陽性症状としたら、こうした生活全般への効力感や統制感の低下は陰性症状と呼ぶことができるかもしれない。ネット依存傾向が高まるにつれて本人にも自覚されやすい陰性症状に注目することも早期の対応において重要ではないかと考えられる。

回避と不安の得点を独立変数、IATの合計得点を従属変数として重回帰分析を行ったところ、回避からは負の影響、不安からは正の影響が確認された。ECR-RSの回避とは他者との親密性を回避することを表している。今回の調査ではインターネット利用をパソコン、携帯電話、スマートフォン、ゲーム機などオンラインで使用するすべてを含むものとして教示している。これらの行為にはインターネットの背後に他者の存在が想定されるものも多い。親密な人間関係を避ける傾向にある者は、結果的にインターネットを介したやりとりにも過度にのめり込まない傾向にあると考えられる。一方、ECR-RSの不安は対人関係において見捨てられることへの不安を反映している。井合・矢澤・根建（2010）が指摘しているように、見捨てられ不安には親密な関係に対するしがみつき・同一視や他者からの好意に対するあきらめという側面が含まれる。そのため、不安の高い者が現実では得られない関係を求めたり、現実の生活や人間関係からの逃避先としてインターネットを選んだ場合に依存しやすい傾向にあるのではないかと考えられる。

さらに、調査対象者をアタッチメント・スタイルによって4つのタイプに分類し、ネット依存傾向に

ついて分散分析を行ったところ、とらわれ型、恐れ型、安定型、拒絶型の順に高かった。重回帰分析の結果からも明らかなように、ネット依存傾向への影響が大きい不安の高いタイプであるとらわれ型、恐れ型が高得点を示した。浜井・利根川・小野田・上淵(2011)は、とらわれ型は関係を築くことへの欲求と拒否への不安というアンビヴァレントな特徴を持っており、対人恐怖回避型（本研究の恐れ型に相当）は親密さを求めるが拒絶されることが怖いので結果的に親しい関係を避けてしまうことになることと説明している。ネット依存傾向が最も高かったとらわれ型は不安を感じながらもインターネットを介したやりとりにも親密な関係を求める傾向にあり、親しい関係を避けてしまう恐怖型に比べてさらにのめり込みやすいのではないだろうか。同様に、不安が低くとらわれ型や恐れ型よりネット依存傾向の低いタイプである安定型と拒絶型についても、やはり回避の低い安定型の方がネット依存傾向は高い。川原（2017）によって自己・他者へのネガティブなスキーマがネット依存傾向に影響を与えることが示唆されていたが、ネガティブな他者観を反映する回避とネガティブな自己観を反映する不安という枠組みを用いることで依存の持つ機能的な意味を理解し、個人に即した支援を検討することに役立つと思われる。

今回はアタッチメント・スタイルという観点からネット依存傾向について検討したが、他にも検討すべき点は多い。今回の調査では男女の数に偏りがあったため参考に留めるが、性別によって不安に差が見られている。性差については今後の課題の1つである。また、今後ウェアラブル端末、AI、AR/VR技術などの発展により、どのような形でインターネットと関わるかによっても問題の表れ方は異なっ

てくることが予想される。ネット依存尺度の時代適合性（総務省情報通信政策研究所, 2014）も検討しなければならないだろう。

文 献

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. New York : Basic Books.

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York : Basic Books.

Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss. Vol.3. Sadness and depression*. New York : Basic Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press.

Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The experiences in close relationships - relationship structures questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23, 615-625.

Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. (2000). An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 350-365.

浜井 聡美・利根川 明子・小野田 亮介・上淵 寿 (2011). 愛着スタイルが対人的葛藤事態における情動に及ぼす影響 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, 62, 305-314.

井合 真海子・矢澤 美香子・根建 金男 (2010). 見捨てられスキーマが境界性パーソナリティ周辺群の徴候に及ぼす影響, パーソナリティ研究, 19, 81-93.

稲垣 俊介・和田 裕一・堀田 龍也 (2016). 高校生におけるインターネット依存傾向と学校生活スキルの関連性とその性差, 日本教育工学会論文誌, 40, 109-112.

伊藤 将晃 (2009). 大学生のインターネット中毒傾向に関

する研究, 臨床教育心理学研究, 35, 9-14.

片山 友子・水野 由子 (2016). 大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性, 総合健診, 43, 657-664.

川原 正人 (2017). 自己・他者へのスキーマがネット依存傾向と精神的健康にもたらす影響 東京未来大学研究紀要, 11, 25-33.

古村 健太郎・村上 達也・戸田 弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価, 心理学研究, 87, 303-313.

総務省 (2017). 平成29年版情報通信白書 Retrieved from <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html> (2018年9月14日)

総務省 (2018). 通信利用動向調査 Retrieved from <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html> (2018年9月14日)

総務省情報通信政策研究所 (2013). 青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査 調査結果報告書 Retrieved from <http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf> (2018年9月14日)

総務省情報通信政策研究所 (2014). 高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査 報告書 Retrieved from http://www.soumu.go.jp/main_content/000302914.pdf (2018年9月14日)

立丸 恵・中谷 隆・堀 匡・大塚 泰正 (2010). 女子大学生における愛着スタイルとストレスコーピングならびに精神的健康との関連, 心理臨床学研究, 28, 336-340.

戸田 秀之・竹内 一夫・堀田 美枝子 (2010). 児童生徒のインターネット依存傾向とメンタルヘルス, 心理・社会的問題性との関連, 学校保健研究, 52, 125-134.

Wei, M., Heppner, P. P., Russell, D. W., & Yound, S. K. (2006). Maladaptive Perfectionism and Ineffective Coping as Mediators Between Attachment and Future Depression: A Prospective Analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 67-79.

山脇 彩・小倉 正義・濱田 祥子・本城 秀次・金子 一史 (2012). 女子中学生におけるインターネット利用の現状とインターネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 59, 53-60.

Young, K. S. (1998). *Caught in The Net: How to*

Recognize the Sign of Internet Addiction - and a Winning Strategy for Recovery. New York: John Wiley & Sons.

鄭 艶花 (2008a). 大学生の<インターネット依存傾向プロセス>と<インターネット依存傾向自覚>に関する実証的研究, 九州大学心理学研究, 9, 111-117.

鄭 艶花 (2008b). インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究, 心理臨床学研究, 26, 72-83.

(かわはら まさと)

【受理日 2018年10月9日】